2024年度「自由を生き抜く実践知大賞」ノミネート一覧　実践事例概要

*№.は実践事例名称の五十音順

NO	実践事例名称	実践主体	取り組み内容	実施しての感想	実践事例資料
1	アーバンデータチャレンジ2023，金賞	デザイン工学部・社会空間情報研究室	2023年10月から2024年3月にかけて，デザイン工学部，社会空間情報研究室，学部4年の安岡拓翔，髙木倖大，三浦柊の3名は，アーバンデータチャレンジ2023に参加しました．アーバンデータチャレンジとは，地方公共団体をはじめとする各機関が保有する社会基盤情報の公開・流通・利用促進に向けた，オープンデータを活用するアイデアコンペティションです．私たちは，研究室の先生および先輩方のご協力のもと「Knight モード」というサービスを考案し，一般部門において金賞を受賞しました（応募数191件中，金賞1件，銀賞3件，銅賞10件）．「Knight モード」は，夜間の軽犯罪や性犯罪の増加に着目し，夜間の1人歩きに不安を抱く人へ向けた防犯特化型の経路検索システムです．システムの考案にあたり，夜道の光源となる構造物の調査や路上犯罪の情報等を調査し，安全な夜道を判断できる要素に関して議論しました．議論の結果，街路灯や路上犯罪，人口のオープンデータを取得し，最短経路を求める手法に基づき安全経路を出力するアルゴリズムを構築しました．これにより，夜間の1人歩きに対する安全性の向上に貢献しました．	私たちは，今回，初めてのコンペティションへの参加でしたが，研究室の先輩方は応募の経験知があるため，献身的なサポートの下で取り組むことができました．先輩方のアドバイスを踏まえ，既存のサービスやオープンデータを徹底的に調査し，データを収集して分析しました．その結果，共感性の高いアイデアを考案できたと考えています．さらに，アイデアの有用性を検証するため，実際に「Knightモード」のプロトタイプを開発しました．開発の過程では何度もプログラムのエラーが発生しましたが，諦めずに取り組み続けた結果，無事に開発できました．このように，徹底的に調査し，得られた理論を実践に移した経験により，今後の研究活動の基盤となる"調査する力"および"やり抜く力"を身に着けることができたと感じています．そして，アイデアの魅力を最大限に伝えるため，研究室のメンバ全員で一丸となり何度も発表練習に取り組みました．その結果，本番の緊張した雰囲気の中でも私たちの実力を発揮することができ，準備の大切さを身に染みて感じました．最終審査会に登壇し，初めて大勢の聴衆の前で発表した経験も，私たちの成長の大きな糧になりました．	審査結果：https://urbandata-challenge.jp/news/udc2023prize 最終審査会アーカイブ （当チームの発表時間：2:56:20~3:01:14，受賞発表時間：5:02:50~5:05:10） ：https://www.youtube.com/watch?v=o5evK52lAhw
2	岩手・宮城・福島MIRAI映像賞2023ダブル受賞	法政大学社会学部青木貞茂ゼミ	2023年7月から11月にかけて、社会学部青木ゼミ28名が『岩手・宮城・福島MIRAI映像賞』に2作品制作・応募し、2作品ともに最優秀賞のMIRAI映像賞に選ばれ青木ゼミ作品が独占受賞を達成した。この映像賞は震災から13年が経った東北3県の「魅力・希望・未来が感じられ、視聴者が3県に足を運びたくなる作品」をテーマにしたPR映像コンテストである。2作品の題材は、旅に新たなワクワクを求める人へ向けた「大自然の中に潜むユニークな世界観」と、SNS社会の忙しさに悩む人へ向けた「東北の音に癒される旅」である。広告制作にあたって、ゼミ生で東北を訪れ、タウンウォッチングをし、東北の魅力を探り、若年層をターゲットに制作を始めた。そこから4ヶ月間、青木教授の指導のもと、インサイト分析、コンセプト設定、キャッチフレーズ制作、映像の企画、撮影・編集を行った。また広告代理店の博報堂を訪問して社員の方へ企画案を発表し、プロの視点でアドバイスをいただいた。その結果、ターゲットインサイトに沿って震災のイメージが未だ残る東北の新たな魅力に繋げるPR動画の制作をすることができ、多くの人に新しい価値を伝えることができた。	これまでのゼミで、社会学部や自分自身など、自分にとって身近なものを広告の手法を用いて効果的に価値を伝える基礎を学んできた。今回教室を飛び出して訪れた東北は、ゼミ生にとって縁もゆかりもない場所であり、ゼロからその土地の魅力を探り続けて、ターゲットである若年層に新たな価値を伝えるという困難な挑戦だった。ゼミでのこれまでの学びをフル活用した。その結果、一つのチームは、東北に隠れた奇抜なスポットに注目し、「大自然の中に潜むユニークな世界観」を表現し、もう一つのチームは東北の癒される雰囲気を表現するために「東北の音」に注目して動画制作を行った。2チームともコンセプトは全く違ったが、今までの東北3県の被災のイメージではなく、復興をして未来に向かって突き進んでいることを前提として新しい東北の魅力を探し出し伝えられた。また青木ゼミではこれまでも毎年秋に、年間のゼミ活動の集大成として東北地域のPR広告制作を行ってきた。過去に別の賞でグランプリ等を複数獲得してきたゼミ活動の伝統・レガシーを受け継ぎ、震災後の東北の課題解決の一助につながる大きな成果を達成したことが非常に嬉しかった。	https://miraiaward.jp/
3	お茶を通じた耕作放棄地改善の取り組み	たまぼら佐野川プロジェクト	たまぼら佐野川プロジェクトは、神奈川県相模原市緑区佐野川地域で耕作放棄地の改善、地域の景観保全を目標に活動しているプロジェクトです。佐野川地域は高齢化・過疎化の影響で耕作放棄地が多くあり、美しい里山の景観が失われつつあります。私達は約10年前から佐野川地域おこしの会と協力し、耕作放棄地だった茶畑を再生し、地域の景観保全に努めてきました。しかし活動の進めていく中、コロナ禍・物価上昇の影響で整備にかかる費用が上昇し、法政大学からの補助金だけでは活動が難しくなりました。そこで、茶畑で収穫したお茶を商品化して販売を行い、その販売収入を茶畑整備費用として充てることとしました。株式会社茶來未さんの協力もあり、香り豊かで程よい渋みが特徴の「佐野川学生茶」という商品を作ることができました。販売は文化祭などの学内イベントや多摩キャンパス周辺地域の神奈川県相模原市緑区若葉台住宅や東京都八王子市館ヶ丘団地で行い、昨年度は206袋を売り上げました。今年も無事にお茶を収穫したので、多くの方にお茶を飲んでいただけるような販売活動と、佐野川地域の景観を保ち続けるよう茶畑の整備活動を続けていきます。	私が実施して感じたことは「共感」の大切さです。実際に、お茶を商品化するとなったときに地域の農家さんから不安だという意見をいただきました。色んな方と話し合い、私達が「なぜ商品化したいか」ということを丁寧に説明したことで、最終的に商品化プロジェクトに共感していただきました。また、商品の販売に際しても、1袋100g1000円という決して安くない値段で売っているのですが、耕作放棄地を生まないために商品を作って販売しているというストーリーに共感していただき、おかげで多くの方に購入していただきました。こうしたことから、佐野川プロジェクトが10年の歴史を紡いできたのは、多くの方に「共感」していただき、ご支援をいただけたおかげだと実感しています。周りの方々への感謝を忘れずに、耕作放棄地の改善に向けて、「共感」を大事にしながら活動を進めていきます。	
4	ごみ箱の集中・再配置で皆が便利に	株式会社エイチ・ユー総合管理部門（多摩）	2023年9月から2024年3月にかけて、多摩キャンパスの総合管理を担当する（株）エイチ・ユーの担当者が、開校当時から多摩キャンパス全域に点在していた屋外用ごみ箱（コンクリート製・ステンレス製）をキャンパス内の通行動線付近に集め、「燃えるごみ用」「燃えないごみ用」等の表示を付けてごみステーションとして利用できるようにした。併せて近年設置された分別回収用のごみ箱についても、食堂や店舗、自動販売機（＝業者が専用ごみ箱を設置）の位置などを考慮して再配置し、利用者が捨てやすく、清掃担当者が効率よく回収できるようにした。この取り組みにより、キャンパスの隅の、何を捨てたらよいのかわからないごみ箱がなくなり、「分別ネイティヴ」である今日の学生が利用しやすいごみステーションを、廃棄費用・購入費用などをかけずに増設させることができた。	多摩キャンパスには毎日多数の学生・教職員が通っているが、一人一人が行く場所は限定されており（自分の学部または職場と、図書館・食堂・生協くらい）、自分の生活圏以外のことはわからない。今回の発案・実践は、日ごろから学内を隈なく巡回し、どこに何があり、どのように使われているか把握しているエイチ・ユーだからこそできたことと思われる。通常総合管理業者は、大学から依頼された業務だけを行えばよいのであるが、本学の子会社である同社は、業務中にひらめいたアイデアをそのままにせず、大学関係者に働きかけて実現させ、キャンパスを利用するすべての人々に恩恵をもたらした。この功績に対し実践知大賞を授与し、広く讃えるべきであると考える。	
5	コロナ禍からの再建～学生・教員のために～	GBC（ガラス箱オフィスアワーセンター）	GBCは、教員・相談員・学生（SA）が協働し、学生に「授業や学生生活における困ったことを相談する場」を提供するべく、2009年に情報科学部に設置されSAが中心となり運営してきた。 運営ノウハウは、これまで先輩から後輩へと引き継がれてきたが、コロナ禍でその伝統は途絶えた。コロナがあけ運営を再開したが、来訪者は激減しついにはGBC不要論まで巻き起こった。そこで、抜本的な改革を行いGBCを再構築し、現在はコロナ禍直後の1.5倍の来訪者に対応している。 改革は、SA・担当教員・相談員で議論を重ね、大きく2つの側面から行った。 ①　学生のニーズの徹底的な把握と対応 ②　SAの対応の質の向上を目指す ①の具体的な方策として、アンケートや来訪者データから何が必要かを可視化するアプリを作成し、あらゆるニーズに柔軟に対応して試験や課題対策の勉強会を開催できる仕組みを構築した。 ②の具体的な方策として、敬語研修、リーダーシップ研修、プレゼン研修や、SA全員がどんな学生にも対応できるよう内部研修等を行うHRD(Human Resource Development：人材育成)部を設置し対応力の向上を図った。	今回の大改革は、SA・担当教員・相談員の知恵を結集し、来訪者の多様なニーズに寄り添い自分たちにベクトルを向けることで実現した。 多様なニーズを知るために、先生方のフィードバックや来訪者データを分析し、学生や先生方がGBCに対して求めているものを常に考えた。自身や仲間の経験・知識を分析に活かすことで、新たなニーズの発見、組織の再構築に繋げられたことに感動した。 また、SAの対応力向上のための様々な試みを通し、各々が自身を振り返り、新たな課題の発見や他のSAから学ぶ機会を得た。例えば、来訪者対応実習で来訪者役を務めることで来訪者のニーズを理解し各自の課題を発見するとともに、他のSAの良い部分を学ぶ機会にもなった。 このように、皆で知恵を出し合い課題を発見し解決策を見出すプロセスは、知的刺激に富み、やりがいを感じた。この知は、将来社会でも実践できると確信している。 GBCの活動は、SAだけではなく先生方や相談員、信頼して訪れてくれる学生に支えられている。これからも感謝を忘れず困ったときに頼れる場であり続けるために、何が必要かを常に考え、より良いGBCを作るために活動していきたい。	https://cis.hosei.ac.jp/faculty/gbc/
6	授業を通したインクルーシブデザインの実践	デザイン工学部システムデザイン学科演習授業「インクルーシブデザイン」	デザイン工学部システムデザイン学科では、2016年から「インクルーシブデザイン」をテーマにしたグループ制作演習授業を行っています。この授業では、身体的な障碍や困難を抱える方をリードユーザーに招き、日常生活における問題を解決するプロダクトの開発を行います。また開発プロセスを短編ドキュメンタリー映像作品としてまとめ、広く共有する事を目指します。 この取組は英国「Fixperts」プロジェクトに賛同し参加するもので、同プロジェクトでは多くの国の若いデザイナーによって1000を超える作品が生み出されています。 2024年度は、授業で制作された「Typing Aid for Toyomitsu」が「2024 The Royal College of Art Helen Hamlyn Fixperts Awards（UK）」優勝を受賞し、「Portable footrest for Yuichiro」が入選しました。 さらに本年は、同賞2021年度の入選作「Shoehorn for Toshihide」がスイスのMuseum für Gestaltung Zürichにて展示され、出版物に掲載されました。	・何らかの障碍を持つ方にリードユーザーとして参加していただく事で、インタビューや観察を通して、当事者が感じる不便に関する理解だけでなく、気持ちや心の動きにも深く共感する事が出来ました。参加者はこのプロジェクトを通し、マイノリティが排除されない社会、多様な人々が生きやすい社会をつくるための、現実的な心構えを得る事が出来たと感じます。また学生自身が協力者（リードユーザー）を探し募る過程も、自身の情熱や人として誠実である事の大切さを学ぶ貴重な機会になっていると感じます。 ・具体的な解決方法を考案し不便を解消する事で、多くのリードユーザーは鮮かに喜びを表現してくれます。参加学生は、器物をデザインする事でユーザーと喜びを分かち合い、そのデザインがユーザーの人生を変えるかもしれない、という事を実感を持って理解する事が出来たと感じます。 ・開発プロセスを英字幕付の短編ドキュメンタリー映像作品として完成する事で、全世界にその取り組みの全貌がわかり易い形で共有する事が出来ました。同年代学生の多い国際コンペティションに参加する事で、国や言語や文化を乗り越える世界的な視野・意識の獲得に寄与する事が出来たと感じます。	■　Typing Aid for Toyomitsu ※2024 The Royal College of Art Helen Hamlyn Fixperts Awards優勝作品 https://youtu.be/OU3SAtQdNVg ■　Portable footrest for Yuichiro ※2024 The Royal College of Art Helen Hamlyn Fixperts Awards 入選作品 https://youtu.be/GaOG97BBmeY ■　Shoehorn for Toshihide ※展覧会「Design for All? Diversity as the Norm」Museum für Gestaltung Zürich, Swiss 展示作品 ※2021 The Royal College of Art Helen Hamlyn Fixperts Awards 入選作品 https://youtu.be/-EpKdk1najU?si=p9xjKGOL9jf0ga8W ■　Picking Up Cane Tool for Keiko ※2019 The Royal College of Art Helen Hamlyn Fixperts Awards 準優勝作品 https://youtu.be/T0Z0ygFUgek?si=wCRkrumidWYURWJB ■　2024 The Royal College of Art Helen Hamlyn Fixperts Awards / Shortlist 発表 https://fixperts.org/2024-shortlist-announced-for-royal-college-of-art-helen-hamlyn-fixperts-awards/ ■　2024 Fixperts Awards / 大賞発表速報 https://www.facebook.com/share/p/EXhPiEGMeHmfL2Ny/ https://x.com/Fixperts/status/1839362317668241463?t=rek-Ivhw1-2WhaDxM3ngtw&s=19 ■　Design for All? Diversity as the Norm, Museum für Gestaltung Zürich, Swiss / 展覧会情報 https://museum-gestaltung.ch/en/ausstellung/design-fuer-alle/
7	ゼミシラバス	経営学部学術ゼミナール委員会	当委員会は全ての経営学部生に貢献するという理念のもと活動している。経営学部のゼミの情報に特化した冊子の「ゼミシラバス」は今年度が初の取り組みであり4ヶ月半に渡りから構成を組んで46ページを制作した。企画を始めた背景として、周りの学生の声から、提供されている既存のコンテンツだけでは各ゼミの差別化が満足にできないという課題があると考えた。そこで私達は、各ゼミの特徴を多角的に比較する冊子の制作を行った。全てのゼミに対して協力を依頼し、その結果、38個のゼミでアンケートを実施し、更に11個のゼミには直接取材を行うことができた。アンケートではゼミの雰囲気を数値化し、知りたいという声の多かった合宿やサブゼミの内容、ゼミの年間活動等の情報を収集。また、取材で得られた「リアル」の情報を言語化した。結果、深度のある情報を収集でき、各ゼミの特徴を定量的かつ多角的に比較し、フルカラーで読みやすい冊子が完成した。ゼミシラバスは入ゼミ活動期間に大内山校舎に設置し、更に合同ゼミ説明会等で配布する予定だ。また、冊子を用いたゼミに関するセミナーを当委員会が主催し、経営学部生がよりゼミ理解を深められる機会を提供した。	今回、私たちは冊子編集の経験がないにもかかわらず、限られた期間の中でレイアウトを含めた冊子の制作に取り組むことになった。ゼミシラバスを制作する上で、特に、経営学部のゼミに関する情報収集において、上級生へのヒアリングが非常に有効だった。実際にゼミを経験した上級生から直接話を聞くことで、生の声やリアルな視点を集めることができた。学生ならではの体験談やゼミの雰囲気などを具体的にまとめ、トピックごとに整理した結果、今までにない新たな魅力を持つ冊子を作り上げることができたと実感している。「これが知りたかった！」と経営学部生が共感するような、学生独自の視点からの情報を詰め込んだ内容は、これからゼミ選びをする学生にとって有益なものになってほしい。また、この冊子を通じてゼミ選びの不安を少しでも軽減できるならば嬉しく思う。来年度以降も、このような学生視点を大切にしながら、さらに内容を充実させ、より多くの経営学部生に役立つゼミシラバスの制作を続けていきたいと考えている。今回の経験を活かし、次回はさらにクオリティの高いものにするために、制作のスケジュールやレイアウトの工夫にも磨きをかけたい。	
8	大好きな"レスリング"を通した国際協力	体育会レスリング部　松山　楓	2024年5月26日から2024年6月15日の期間で、本学体育会レスリング部に所属する松山　楓がオセアニアの小さな島国パラオ共和国で現地女子選手の強化に取り組んだ。私がパラオから日本に帰国後、マーシャル諸島でMicronesian　Gamesが開催され、そこで結果を残すための強化に携わった。大会に帯同することは叶わなかったが圧倒的な力の差と、技術力で優勝したと報告を受けた。 取り組み内容としては、週7回午前5時30分からのランニングやウエイトトレーニング、週6回午後5時からのマット練習でのメニュー作成、技術指導を行った。日本の女子レスリングはお家芸と呼ばれるほどレベルが高いため、私が普段行っているメニューや私自身が持っている技術を環境や選手のレベルと相談しながら伝えた。また、練習に初めて参加した子へレスリングに興味を持ってもらうためにレスリングの動作を用いた基礎トレーニングを並行して実施し、普及活動も行った。滞在期間中には、パラオ大統領、JICAパラオ事務所、現役JICA青年海外協力隊員の方々、在パラオ日本国大使といった多くの方々と意見交換及び、私自身が行っている活動について知ってもらう機会を得ることができた。	私は将来レスリングを通した国際協力をし、世界各国でレスリングの魅力を伝えたい。今回の派遣は、日本から国籍を変えサモア代表としてパリ五輪に出場した赤澤　岳氏の呼びかけを見て個人的に連絡をして実現した。パラオについて何も知識がない上に、レスリングを指導するという経験もなかった私だったが、明るく社交的な性格、レスリングに対する熱い思いとチャレンジ精神で活動を無事終えることができた。今回の活動を通して、国際協力の魅力や常に挑戦することの重要性を学んだ。また現在、私が大好きなレスリングに恵まれた環境で取り組めているということを実感したとともに、どの国や地域でもレスリングが良い環境、指導者の下で取り組めるようになってほしいという夢ができた。パラオにある日本・パラオ友好の橋のように、パラオをはじめ世界各国のレスリングをつなぐ「架け橋」になりたいと考えるようになった。目の前に転がってきたチャンスを自分のものにする勇気、本学らしい自由で自発的な活動ができたのではないかと感じる。これからも本学学生らしく、世界に羽ばたき、いつか世界中の選手が良い環境で、そしてレスリング競技の普及活動を行っていきたい。	https://mamo.style/news/meiji2024-4/
9	ダイバーシティ・エクイティ＆インクルージョンセンターの開設	ダイバーシティ・エクイティ＆インクルージョンセンター	いつ、だれが、どこで、どのような事に取り組まれたかを記入してください。 2024年4月に法政大学ダイバーシティ・エクイティ＆インクルージョンセンター（DEIセンター）を開設。多様な背景をもつ学生・教職員の修学、服務上の妨げを取り除き、インクルーシブな環境を整備することで、本学が安心して創造的に、学び、働き、それぞれの個性を伸ばせる場になるよう取り組んでいる。多様性を尊重し、互いに理解し合うための情報発信・交流拠点「DIVERSITY LOUNGE」を併設し、関連書籍の閲覧・貸出や、専門コーディネーターが常駐し、多様な学生が安心して過ごせる環境を提供。毎日20人前後の学生が訪れ、利用されている。大学の方針や取組をまとめた「ダイバーシティに関するガイドライン」の発行や、性の多様性に関する個別相談の実施、レインボーサロン等の定期イベントを開催。秋には3キャンパスで無償生理用品配布ボックス設置（モニタリング調査）や、DIVERSITY WEEKsで学生企画を複数実施予定。全学的な体制でDEI（多様性、公平性、包摂性）を推進し、学生・教職員が協働で、多様性を包摂する大学づくりに取り組んでいる。	法政大学は、これまでも多様な人々が集う場でしたが、その誰もが安心して創造的に、学び、働ける環境かというと、まだまだ十分ではありません。無意識に「当たり前」と思ってしまっている制度や施設、言動の中にも、実はより包摂的なものに変えていくことで、誰にとっても安心して力を発揮できるようになるものがたくさんあります。DEIセンターが開設され、可視化されたことで、多くの学生や教員、職員がDEIセンターを訪れ、様々な声を届けてくれるようになりました。対話や共感などを大切にしながら、多様性を包摂する大学に向けて、一つひとつ取り組みを進めていきたいです。	https://www.hosei.ac.jp/diversity/
10	年刊文芸誌『法政文芸』の企画・編集・発行	法政大学国文学会（文学部日本文学科）	『法政文芸』は、日本文学科の学会組織法政大学国文学会が2005年に創刊した、年刊の文芸誌である。日本文学科文芸コース学生の優秀卒業制作の発表舞台とすることを中心に、毎号学生編集委員の企画・編集によって、その年を象徴する文化・文学事象を取り上げて特集を組み、関係各書店で販売する他、毎年文学フリマに出店して、社会への発信を行っている。 　第2号より日本文学科教員3名が持ち回りで編集を務め、学部学生を募って編集委員体制を取るようになり、24年には20号を迎えるに至った。現在は日本文学科学生委員会の一組織として、授業やゼミの枠組みを超えた編集委員会として活動している。 　特集のテーマは学生編集委員の合議によって決定され、テーマに相応しい著名人を選定、インタビューや対談を企画・実施し、さらに複数人にエッセイや評論を依頼、校正や編集を行っている。20号では記念号として編集に携わった卒業生と現役編集委員による座談会を実施し、継承と今後の展望について確認しあった。 　また創刊20号の特別展示を、2024年9月3日から28日まで、博物館展示室において、日本文学科創設100周年企画展示と併せて開催した。	20年の歩みの中で、学生編集委員の成長には目を見張るものがあった。最初の数年は編集担当の教員を中心に企画会議などを行っていたが、2010年（第6号）の頃から、学生が主体となって特集ページを企画、編集する形が完成した。担当教員は学生編集委員と定期的に連絡を取り合い、時には社会的公正等の面から適宜アドバイスをすることはあるが、そうした事例は稀である。前編集委員からの引継によって、編集のノウハウが継承されている。 　特集企画を決定する際には、委員各自が持ち寄った企画案をプレゼンし、合議によって時代に相応しいテーマを決める。その後、インタビューしたい著名人やエッセイや評論を頼みたい文化人を出し合い、本人に連絡を取って依頼し、スケジュールを組んで実施し、文字起こしや構成、エッセイや評論の校正など、雑誌編集の実践的な業務をすべて学生自らが行っている。 　自分たちで自由に企画立案し、ゴールを定めてチームとして協力して雑誌刊行というプロジェクトを完遂する、これはまさに実践知と言い得る活動であり、ここでの経験がマスコミ系に就職した者のみならず、職場のさまざまな場面で活かされていると語る卒業生は多い。	https://nichibun.ws.hosei.ac.jp/wp/?p=5006　（『法政文芸』第19号刊行のお知らせ） https://www.hosei.ac.jp/info/article-20240829135240/　（『文学部日本文学科の100年と『法政文芸』の20年」特別展示のお知らせ）
11	HOSEI GLOBAL CHALLENGERS CAMP 2024	HGCC運営チーム	このキャンプは、多様性と社会起業をテーマにした全国の中高生を対象とする宿泊型サマーキャンプで、2024年8月19日～23日に市ヶ谷キャンパスで開催しました。キャンプでは、参加生徒が社会課題とその解決策をグループで調査しプロジェクトにまとめ、最終的に英語でプレゼンテーションを行いました。このキャンプは教育事業に携わる卒業生、学生、教員、グローバル教育センター職員が共同で企画・運営を行いました。4月から具体的な企画を立て始め、キャンプのテーマ設定、講演者の選定などは卒業生と教職員が行い、事前オンラインミートアップ、グループワークのメンタリング、オリエンテーション、歓送迎パーティー、最終プレゼンテーションの企画・運営は学生が主体となり、卒業生・教職員のサポートを受け実施しました。特に最終プレゼンテーションに向けたグループワークについては、学生がメンターとして各グループに1名ずつ付き、アドバイスや英語の添削などを行い、参加生徒をサポートしました。 　北海道から沖縄まで多様な中高生が参加し、多様性と社会起業を学び、さらに講演や学生・教職員との交流を通じて法政大学のPRをすることができました。	5日間という短い期間でしたが、参加した中高生の高いモチベーションとキャンプを通じた成長を側で感じることができ、逆に参加生徒から学ぶことが多々あり貴重な経験をすることができました。卒業生、学生、教職員という様々な立場のメンバーでキャンプを作り上げる過程は、楽しさも苦労もありました。4月から企画を開始し、オンラインでの打ち合わせを重ねましたが、特に学生主体で進める部分については、授業や留学などで全員が対面で揃ったのがキャンプ初日だったこともあり、進めるのが難しい部分もありました。しかし、卒業生の方や教職員の助言やサポートもあり、またキャンプを通じてメンバー全員のチームワークを成熟させることもでき、困難を乗り越えることができました。キャンプのお手伝いという立場ではなく、キャンプの重要な部分である最終プレゼンテーションの運営やグループワークのメンターを学生主体で取り組むことで、参加生徒に対し「リアルな法政大学」を体験してもらえたと思います。参加した中高生が「キャンプ前までは法政への進学を考えていなかったけど、参加したことで法政も良いな」と言ってくれたことが何よりの喜びです。	https://www.global.hosei.ac.jp/news/news-2024-38438/
12	ボランティアキャンプ・フィールドワーク	法政SIC＋水野雅男	能登半島地震被災地の珠洲市におけるボランティア活動と被災地の実態調査を行うフィールドワーク参加者（羽田空港からの交通費支給）を募集し、25名の学生（法政大学22名、他大学3名）が参加した。水野が1月中旬に珠洲市を訪れ、諸々準備を整え、3月1日に「ボランティアキャンプすず」を開設した。法政SICと（一社）SAVE IWATEなどが同運営協議会を設立、珠洲市所有地を借用し（株）モンベルやSoftbankなどが協力して環境を整えた。それから6ヶ月間、珠洲市や能登町の災害ボランティアセンターと協力関係を構築するとともに、各地区リーダーからの要請にも応じボランティア派遣拠点の実績を積み上げた。 FW参加学生は各々1週間滞在し、ボランティア活動に取り組む一方で、個々が関心を寄せることを調査するために、インタビューや現地踏査等のフィールドワークを実施した。その項目は、避難所運営、障害者避難、農林水産業の被災状況、復興まちづくりへの地域住民の声など多岐にわたる。地域社会とのネットワークを基盤に、彼らの要求に応じられる現場・該当者を調整・依頼し、のべ150日分のカスタマイズ・プログラムを遂行した。	FW参加学生全員から、以下の項目（①被災者支援ボランティア活動を通じて得られたこと、②個別のフィールド調査で得られたこと、③ボランティアキャンプ場で感じたこと、④その他）についてレポートを提出してもらった。被災地に身を置いたり被災者の話を直に聴いたことによりマスコミの情報との格差を体感している。また、全国から集まっている一般ボランティアの方々との協働作業やキャンプ場での交流を通じて、チームワークの大切さや学生に求められていることに気づき、自身の今後の進路について大きな影響を受けていることが伺える。 【その後の展開】 9月14日～16日に、多摩キャンパスで"CAMP in Campus"の実証実験を開催した。そこには、FW参加学生だけでなく、ボランティアキャンプすずに滞在し活動していた方々も遠方から参画された。今回のFWで得られたことを共有するとともに、ボランティアキャンプの必要性と課題、大学キャンパスの資源性の確認を行いながら、避難生活拠点に併せてボランティア拠点を大学キャンパスに構築・運営することについて論じた。藤沢市や相模原市など近隣自治体からも関心を寄せて参加された。	https://www.facebook.com/volunteercampsuzu/